

特集

「ウポポイ」開業記念

アイヌ語由来地名辞典

(道央・道南編)

「川」「別」「内」が中心

北海道の地名を概観す 付くものが目立つ。「川」「別」「内」が中心

上砂川、新十津川、赤井川、むかわ(鷗川)、浦河、旭川、上川、東川、下川、中川の計13。「別」は、

芦別、秩父別、江別、当別、喜茂別、登別、士別、愛別、初山別、遠別、浜頓別、中頓別、紋別、津別、湧別、更別、幕別、本別、

陸別、別海の計20。「内」は、歌志内、黒松内、岩内、神恵内、知内、木古内、幌加内、稚内、中札内の計9となっている。ちなみに、大空町には旧女満別町、新ひだか町には旧静内町が存在していた。

民族共生象徴空間「ウポポイ」の開業により、アイヌ文化への関心が高まっている。一口にアイヌ文化といっても、内容は多岐にわたるが、アイヌ語に由来する地名は最も身近な存在といえるだろう。「アイヌ語地名」は北海道遺産にも登録されている。北海道の地名は、ほとんどがアイヌ語と何らかの関係があるといっている。なかには長万部、倶知安といった全国的に知られた難読地名もあり、その軽妙な響きは多くの旅人に北海道への憧憬の念を抱かせている。自分の故郷でも意外と知らない地名の由来を、道央・道南(空知・石狩・後志・日高・胆振、渡島・檜山)、道東・道北(上川・留萌・宗谷・オホーツク・十勝・釧路・根室)に分けて紹介したいと思う。

(フリーライター・内海達志)



▲深川駅。前後に砂川、滝川、旭川と「川」の主要駅が並ぶ

これらは共通項があり、「別」「ベツ」と「内」「ナイ」は「川」「沢」を意味する言葉で、その意識が「川」なのである。意味的には岩見沢もこの「川グループ」に加えてよか



▲閻魔様が迎えてくれる登別

える。雄渾な大河が流れる大地が連想され、いかにも北海道らしい。自治体名だけでこれほどあるのだから、小さな

札幌の由来は豊平川

まずは空知から。夕張の語源は「ユーパロ」(鉱泉が湧出するところ)。現在は休業中だが、「ユーパロの湯」にその名をとどめる。

道産子以外は恐らく読めないであろう美唄は「ビバオイ」(鳥貝の多いところ)。内陸で貝のイメージはないが、昔は沼貝村と呼ばれていた。

滝川の場合は、地域名の空知「ソラプチ」(滝が並んでいるところ)が先で、ソラプチの意識から滝川となった。

歌志内は「オタウシナイ」(砂がたたくさんある

集落名なども含めれば膨大な数になるはずだ。では、ここからは各エリアの主な地名を拾い上げていこう。

川)。近接する砂川はその意識である。

由仁は「ユウニ」(温泉があるところ)。町内を流れる珍名のヤリキレナイ川は、しばしばテレビ番組でも取り上げられる有名スポットだ。ヤリキレナイとは「魚の住まない川」を意味するという。

浦臼は「ウラシナイ」

も札幌の由来を知っている

「モセウシ」(イラクサが繁茂したところ)。ほぼ原音に近い。

これまた難読の秩父別は「チックシベツ」(通路のある川)。留萌線の秩父別駅は開業当初、筑紫と名乗っていた。

雨竜は「ウリロベツ」(鵜の多い川)。当時は雨竜川の河口に多くの鵜が生息していたという。

続いては石狩。市民でも札幌の由来を知っている



札幌の由来に関する豊平川

る人は少ないのではないかと。「サッポロ」とは「乾いた大きい」という意味合いで、それは乾季の豊平川を指す。

手稲は「テイネイ」(下ロドロしたところ)。泥

ろう。多くの地名が川を中心に命名されたことからわかるように、アイヌの人々にとって川は生活に欠かせないものであったのだ。

このほか「広い、大きい」という意味の「幌」(ポロ)も多く、南幌、札幌、幌加内、羽幌、幌延、美幌、士幌、上士幌、浦幌の計9(いずれも掲載順は道庁HPに拠る)を数



▲2019年に廃止された夕張駅



続きは『月刊クオリティ』本誌を
ご覧ください。

▼ ご購読のお申し込みは ▼

○インターネットでのお申し込みはこちらから
<http://qualitynet.co.jp/koudoku/>

○お電話でのお申し込みはこちらから

TEL 011-644-0101

(9:00 ~ 17:30 土日・祝日をのぞく)